

平成9(1997)年度修士論文要旨

「国語教育におけるパラダイム転換」

—西郷竹彦文芸教育理論に学ぶ—

教育学 池田昌史

本研究において、私は教育の役割を『子どもたちが主体的に学び方を学び、自己変革をおこし、自らが自らを成長させていける「自己教育力」の育成である。』と定義し、第一章では、先行研究として現在の学校教育が抱えている問題点を考察することになった。そこでは、「新しい学力観」や「生きる力」を考察することをテーマとし、現在の教育界での動向（教育改革）に触れた。そしてやはり、この改革も、子どもたちの主体性を回復することに努力がなされていることが理解された。しかしながら、そこで改革方針に私は多少の疑問を感じる点があるために、その問題点を明らかにすることをも含めて私なりの考えをまとめていくことになる。

もちろん、子どもの主体性を回復していく、形成していくという、目標に関しては私も批判する点はない。そして、この主体性を回復するアプローチの手段として、私は国語科が専門科目となるため国語教育という教科を媒体とし、子どもたちの主体性の育成を考えていくことになった。

第二章では国語科の歴史、学習指導要領国語科編の変遷を中心に、これまでの国語科の問題点を探ることになる。その考察の結果、我が国の国語科教育は、読解主義的な学習や道徳主義に転化された教材として扱われたり、ことばのもつ、伝達性という性質から、他の教科の用具教科として位置付けられもした。

このような言語主義的な考え方は、正しい言語に対する知識を子どもに習得させることが国語科の使命であるという理解のもと、言語技術

教育などと言われ、さかんに行われていたのがある。

しかしながら、国語科で扱う教材を上記のように表面的なものとして読んだり、一面的道徳観の強要であったりしてはいけない。ということを目指するグループが登場してきた。それが、今回私が、本研究において紹介することになる西郷竹彦であり、文芸教育研究協議会である。彼らの紹介は、第三章、第四章をとおして、詳しく述べているのでそちらを参照されたいが、ここでは簡単にかれらの目指す教育がどのようなものであるのか、触れることにする。

西郷竹彦たちは、国語科の全体像なるものを確立する。それは、文芸、説明文、文法などそれぞれの領域がバラバラに組織されていることへの問題提起でもあり、国語科が〈もの見方、考え方—分り方〉という認識方法によって体系的な構造をもつという認識から確立された。そして現在、この考えは、国語科のみならず、すべての教科を結び付ける方法論であるとしている。

西郷たちは、この〈もの見方、考え方〉を育成することが人間認識・世界認識を深めるものであるとし、結果として、子どもたちの人間観・世界観を育てるものとなると考えている。この人間観・世界観を深めることは、子どもたちの主体性の回復を意味するものである。

この人間観・世界観を育成していくうえで、西郷たちは、文芸というものを教材として掲げる。それは、文芸が人間を「まるごと描く」という性格をもつものであり、そのまるごと

描かれた世界を〈同化と異化〉の体験を踏まえて共体験していくことに、主体性の回復の可能性を見ている。この〈同化と異化〉の体験こそが、作者と読者との間に「ドラマ」を形成するものであり、その取り組みにこそが、主体性が存在する。つまり、読者である子どもたち自身が、自分の人間観・世界観をもって芸術家である作者の描き出した文芸の世界と、葛藤する姿に主体性の回復を見いだすのである。それゆえ、国語教育ではこの葛藤の場を子どもたちに与えることが大切であるとし、文芸研は「文芸研方式」という読み方指導の方法を作っている。

この葛藤を生み出すものを西郷たちは、〈矛盾〉であるとし、その矛盾は、ものごとを相対的にとらえる眼があればこそ、明らかになると考えている。この相対性の意義を西郷は、美の問題におきかえ説明する。美には、矛盾したものの、異質なものを止揚統合する活動がある。このことは、文芸が芸術家によって創造されたものであるため文芸の世界でも存在する現象であ

る。この芸術家によって創造された、矛盾〈異質なもの〉を多く含んだ文芸世界を体験し、その葛藤を統一していくことに教育的意義がある。このような葛藤を経験することで、子どもたちは、自分の人間観・世界観に変革をもたらし、自己変革を体験する。この体験が子どもたちの人間観なり世界観なりを深め、いずれは、我々が生きている世界に対しても、子どもたちがそこに潜む矛盾に気づくようになり、その世界を、変化・発展させていくようになる。

この自己の変革が周りの世界をも変革していくような子どもの育成、つまり主体性のある子どもの回復・形成・発展を西郷は考えているのである。

最後に、私はこのような西郷たちの教育観を受け入れる方向で、現代の教育改革に疑問を投げかけるとともに、これからの教育観としてこれが、有力な提案になることを期待し論を終える。

真の社会科学理論の再生

教育学 狩谷 一博

本研究は近代合理主義の特徴である二項対立によって教育が考えられている点に疑問を持ったことに始まる。私は、教育の世界では対象の論理を明らかにすることは、あくまでも手がかりにしかり成りえないと考えている。

同じように経験主義の立場も近代合理主義の限界を感じその乗り越えが試みられている。それは戦後すぐに経験主義の立場で作成された『学習指導要領』に表れている。

そのなかでも「人間の成長」と深く関わっていると考えられる「社会科」に注目した。そこ

で、昭和26年に経験主義の立場から作成された『小学校学習指導要領社会科編（試案）』の理論を作成者の文献などにより明らかにし、行為の立場から教育を捉え直す必要性を指摘することを目指した。

第1章では、初期の社会科学理論において考えられていた社会科の理念がなにゆえに軽視されてしまったのかを追究すべく、『小学校学習指導要領社会科編（試案）』と昭和33年に作成された『小学校学習指導要領（告示）』の理論を比較考察した。その結果、昭和26年と昭和33年の『学

習指導要領』では中心概念が「学習活動」から「学習内容」に変わっていることがわかった。

そして、4つの観点(①知識と道徳の統一②目標と内容の関連性③内容の規定④試案と告示)から考察結果をまとめた。

第2章では、大槻・上田論争を取り上げ認識論について考察した。その結果近代合理主義の立場と『小学校学習指導要領社会科編(試案)』との立場では教育の系統の考え方に違いがあるということがわかった。前者は、教育の系統を教科の中に見ており、後者は教科にではなく子どもの中に成立する系統と考えていた。そして、『小学校学校指導要領社会科編(試案)』では、知識や経験が学習活動、とりわけ問題解決によって成り立つと考えられていた。

第3章では、社会科にとって問題解決による学習が核とならなければならないこと、そして、そこで言われる「問題」とは子どもにとって「切

実な問題」でなければならないということであった。

そこから、問題解決は生きる過程における決断の連続であり、決断が重要な意味を持つという結論に達した。

第4章では、『小学校学習指導要領社会科編(試案)』の立場が、近代合理主義の立場からではなく、行為の立場から作成されたものであること、そして、主体と客体に生じる関係つまり行為に着目している点にあることを指摘した。

また、主体と客体に生じる関係に成立する「意味の世界」にこそ目を向けなければならないことを指摘した。問題解決の連続が「意味の世界」を創造する唯一の方法であり、「生」そのものの証であるという結論に達した。

そして、行為の立場から教育を捉え直す必要性を指摘した。

本土における沖縄文化の意義と課題

—大正沖縄子ども会を中心に—

教育学 志村 直

本論は本土に住む沖縄県出身者の歴史、地域の子どもの会の活動をルポルタージュ風にまとめ、最後に彼らの文化の意義や課題を考察したものである。

時は大正時代にまで遡る。沖縄の経済は逼迫していた。「ソテツ地獄」と言われた貧困から逃れるため、大勢のウチナンチュが職を求めて本土へ渡ってきた。しかし彼らを待ち受けていたのは厳しい社会の現実だった。差別、偏見。そこで彼らは「同化」することで自らの身を守るが、これは誇りとしている自分達の文化を否定し去るということを意味した。残念ながらこの傾向は沖縄でも顕著になり、戦後の高度経済

成長期まで続く。戦争、占領、復帰。時代の波に翻弄された沖縄はそれでも本土に追従してきたが、70年代に入ってようやく本土化への警鐘が鳴らされ始めた。だがこの時、沖縄教育界は意外なところから「沖縄文化の見直し」を迫られる。

大阪市大正区で「大正沖縄子ども会」の活動を指導している沖縄出身の小学校教師、仲村昇さんは「本土のウチナンチュ2世3世に沖縄文化が伝わっていない」と、子ども達を集めサンシンを持たせた。子ども達の腕はメキメキ上達したが、そればかりでなく子ども達の心の中に「自分のルーツは沖縄」だということを実感さ

せるに至った。そして1980年、子ども会は沖縄遠征で現地の子、親、そして教師達の度肝を抜く…。

「本土における沖縄文化の意義とは何か」それは本土の中で多数派であるヤマトンチュに囲まれて生活しているウチナンチュしか持ちえない感性ではないだろうか。具体的には「自分達が少数派であるということを自覚できる」「多数派であるヤマトンチュに少数派の存在をアピールできる」「故郷から遠く離れている分だけ故郷の文化に愛着を持てる」といったところだろう。本論では「少数派」にこだわっているが、これはベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」を理論的背景にしている。「国民国家とは

人為的に作られた虚構の産物」であるという前提のもと、国家主義教育の弊害を理解し、ひとりひとりが「少数派」であることを認識した上で多文化共生社会を築き上げる必要性を指摘した。

本論で「本土に住むウチナンチュの今後の課題」として、「例えば「リトル・オキナワ」を作るなどして少数派である自分達の文化をもっともっとアピールしたらいい」と記したが、この考えは「多文化共生社会の必要性」という考え方に依拠したものである。本土に住むウチナンチュにしか出来ないことがある、そんな思いを込めて本論を執筆した。

道具使用と状況

教育学 長谷川千洋

道具使用の心理学的研究においては、行為、道具に対する認知、及び使用への意図という3側面からの検討に加えて、道具を取りまく状況の中で行為を捉える必要がある。本研究では行為および認知の階層性を踏まえながらも、それぞれを独立した機能として個別に分析するのではなく、むしろ全体的・包括的な視点で、道具使用と状況の関係、さらに意図と行為の関係についての考察を試みる。具体的には、行為の中でも最も日常的・習慣的であり、発達の比較的初期に獲得されるスプーンの使用に注目し、脳損傷者と幼児を対象にした観察・分析を行い、そのメカニズムを検討する。

第2章では、脳損傷後に自分の意図したように道具を使うことができない症状を呈する観念失行の患者を対象とし、道具使用の障害の側面から神経心理学的見地を参照にした検証を行う。

この研究は、左脳障害患者の道具使用時における観念失行が、環境からの情報によりどのような影響を受けるかを明らかにする事を目的とした。観察方法として、検査室の中で単一物品(スプーン)を使用する状況から、日常場面まで様々な状況を設定した。その結果、全症例が、日常的状況と切り放された単一物品のみの使用で失行を示すが、その物品と意味連想の高い物品が加わり、より日常場面に類似するに従い、観念失行が消失し、検査室においても正常な道具操作が可能になった。すなわち、道具使用における状況の影響が顕著に呈示された。

第3章においては、道具使用の発展的側面分析を目的とし、0～2歳児までの最初の道具使用の獲得の過程を調べた。第2章での観察方法同様、スプーンの操作が実際の食事場面、及び道具の単独状況でどのように変化するかを観察

・分析した。結果として、幼児では、道具操作の自立がその使用における重要な役割を占めると推測された。更に、運動機能、表象・概念の形成、及び意図の形成が、道具使用のスキルの発達を考える上で必須の問題であると示唆された。

最後に第4章では総合的な考察と今後の研究展望を行う。まず、意図と行為を包括的に捉えた道具使用メカニズムのモデルを呈示する。このモデルの特徴は、下位の運動行為レベルにおいて“運動スキーマ”という概念を仮定し、それを比較的自動的で安定した機能と考え、その

上位に表象、意図、行為がインタラクティブな関係で構成されていると仮定する。観念失行のような行為障害やスリップ現象がおこる原因についても、モデルによる説明を試みる。また、道具使用は行為者-道具-目的物の相補的關係として捉え、状況において変化する流動的な動きをそのまま見ようとする状況論の考え方もとり入れる。最後に、行為の意図性・自動性といった観点からの考察も加え、われわれの行為や意図のメカニズムを解明する手がかりとしての、道具使用研究の位置づけを指摘する。

展望的記憶課題における認知過程の実験的検討

教育学 森田 泰介

本論文は、展望的記憶課題における認知過程に関する実験的研究が、今後どのような視点・方法論に基づいて研究を進めて行くべきかについての考察を行うことを目的とした、理論編と実験編の2部より構成されており、理論編において提案された新しい視点・方法論に基づいて行った実験を実験編において呈示することにより、その視点・方法論の有用性を示した。

理論編ではまず第1章において、これまでの展望的記憶課題の認知過程に関する研究がどのように展開されてきたのかについて次のような概観を行った。つまり、心理学の初期においては展望的記憶に関する優れた考察がなされていたのにも関わらず、近年になるまでその認知過程に関する考察が行われてこなかった。1970年代後半から日常記憶への関心の高まりによりようやく展望的記憶研究が注目された。そのような関心のもとに始められた初期の展望的記憶研究は多くが日常場面においてなされたもの

であるため二次変数の統制が十分なされていないなど、問題を含むものであった。しかし近年盛んに行われている展望的記憶に関する実験室実験は、統制の問題を解決し、認知過程に関する厳密な検討を可能とするものとなっている点で非常に有望であり、現在は展望的記憶課題遂行時の認知過程に関する知見が急激に蓄積しつつある。

第2章では、従来の展望的記憶課題の認知過程に関する実験的研究が主に扱ってきたテーマである、手がかりの性質、加齢の影響、回想的記憶との相違に関して、テーマ毎にこれまで得られた知見をまとめ、それらの研究の検討中の問題について考察を行った。いずれのテーマも有用な知見をもたらすものであるが、手がかりの性質に関しては内的な要因との相互作用の重視が、加齢の影響に関しては加齢を補償する技術の開発が、回想的記憶との相違に関してはその認知過程に関する詳しい検討が必要であると

の提案がなされた。

第3章では、これからの展望的記憶課題の認知過程に関する実験的研究が扱って行くべき3つのテーマ（文化・社会的要因、自伝的記憶、無意図的想起）について論じ、それらを研究する際に採るべき視点と方法論を具体的に呈示した。文化・社会的要因に関しては、特に複数人で遂行する展望的記憶課題や展望的記憶課題の構造を変化させる道具に関する検討が必要であると考察された。自伝的記憶に関しては、自伝的記憶と展望的記憶が相互作用していることが述べられ、両者の関係についての検討が必要であると考察された。無意図的想起に関しては、有用な無意図的想起がどのようなメカニズムによって起こりうるのかに関する議論がなされ、特に手続き的な記憶の重要性が説かれた。また、各テーマを研究する際の方法論については、テーマ別に、実験室において行うことが可能な展望的記憶課題を用いた実験方法が提案された。

実験編では、理論編で提案された視点と方法論に基づいて著者によって行われた3つの実験が呈示された。第1章では外界に存在する道具が主体に与える情報と、主体の内的な状態とがどのように相互作用しているのかについての実験を紹介した。タイムモニタリングの頻度が主体の内的な過程の指標として用いられ、実験の結果、道具が与える情報は、主体の認知の効率

性を増加させることが明らかとされた。

第2章では、展望的記憶課題において道具が存在することにより、記憶表象がどのような影響を受けるのかについて検討した実験を紹介した。メモとアラームが展望的記憶課題の遂行を補助する道具として利用可能であると主体に認知させることにより、記憶表象の活性化レベルにどのような変化が起こるのかについての検討が、再認課題における反応時間を指標としてなされた。結果、メモやアラームの存在が、展望的記憶表象の活性化を妨げることが明らかとなった。

第3章では、展望的記憶課題における運動的な記憶の役割についての検討を行った実験が紹介された。保持期間中になされるリハーサルを抑制する課題として、運動抑制課題、構音抑制課題が被験者に課され、展望的記憶課題の遂行を妨害する課題はいずれの課題であるのかについての検討がなされた。実験の結果、運動的な表象によるリハーサルを妨害すると考えられる運動抑制課題が行われた場合に、展望的記憶成績が低下する可能性があることが明らかになった。展望的記憶課題において、運動的な記憶が利用されていることが示唆された。

以上の内容からなる本論文は、今後の展望的記憶課題における認知過程に関する実験的研究が、我々の日常生活に有用な知見をもたらすことを目指すものである。

「自己愛障害」について

—ユングの分析心理学とコフートの自己心理学から

教育学 首藤 賢

本論文では、自己愛障害を通して、Kohutの述べる自己心理学とJungの述べる分析心理学との相違について検討していきたい。

「はじめに」では、近年分析心理学の立場から

試みられている自己心理学へのアプローチの動きについて紹介し、両者の接点について検討する。

「1. コフートについて」ではまず、彼自身が

述べる自己心理学の理論について概観し、彼自身がナルシズムの病理として捉える自己愛障害の諸相について検討をおこなう。古典的精神分析では、自己愛の構造は前エディプス期に端を発するとみなされ、その為分析場面にて転移様相を生じないとされてきた。しかしコフートは複雑な防衛規制から生じる転移を見だし、分析的治療アプローチが可能であるとしている。「2. ナルシズムについて」では、ナルシズムを発達段階からの観点、自尊心からの観点としてそれぞれ取り上げ、検討していく。古典的精神学において、ナルシズムは自体愛→自己愛→対象愛へと変容していく一段階に過ぎず、発達段階において克服されるべきものとして扱われていた。しかし、健康な生活を営む上において自尊心はわれわれの生活に大きな役割を果たしている。その為、ナルシズムの健康な状態、不健康（病的）な状態を有益であると考ええる。「3. 個性化について」では、ユングの述べる個性化の問題について検討する。ユングは個性

化の概念について様々な見解を述べているが、ナルシズムとの観点からもう一度個性化の概念について検討を行い、コフートの述べる「自己愛リビドーの成熟」との接点を探っていく。

「4. ユングの述べる自己について」では、個性化の問題と密接に関連しているユングの述べる自己の概念について検討する。ユングは自我と自己の概念を区別し、自我を「意識の中心」とするのに対し、自己を「心の全体性」を表すものとして捉えている。そして両者の関係性が重要だと考えているが、この両者の関係性を述べていると考えられるE・Neumannの提唱する自我-自己軸の概念を紹介検討を行いたい。

「5. 自己愛の成熟目標と個性化について」では、コフートの述べる自己愛リビドーの成熟目標である「共感」「創造性」「ユーモア」「知恵」について検討する。またこれらの目標がユングの述べる個性化の中でどのような意味をもつのかについて検討し、個性化の目指す地点について考察していきたい。

身体像境界とボディ・イメージについての一考察

教育学 竹田 史恵

筆者は身体像境界のあり方とボディ・イメージの評価に興味を持ったことから、健常者と精神障害者では、これらがどのように現れるかを調査しようと考えた。そこで本研究では、身体像境界を自己と外界とを区別する際に個人が身体について持っているイメージと定義し、自我境界と同義のものとして見なした上で、ロールシャッハ・テストの身体像境界得点 (body image boundary) と HBIT (葉賀式ボディ・イメージテスト) を用いて、臨床群、半健康群、健

康群の三群を対象として調査を行った。

その結果、HBITによるボディ・イメージの評価では、HBITの6因子のうち身体機能因子とされるF2、およびF3で有意な差が認められ、その得点はいずれも臨床群で最も低く、次いで半健康群、健康群の順であることが分かった。また、三群における平均値の差の開きは、半健康群と臨床群との間で大きく、健康群との間ではやや小さかった。しかし臨床群において、健康群と半健康群よりも有意に低く評価された

HBITの因子は身体機能因子のみであった。残るプロポーシオン（身体外観面）因子については、有意差こそ見られなかったものの、半健康群において最も低く評価されていることが明らかになった。このことから、臨床群のボディ・イメージ得点には、病気や精神状態に対する意識や不健康感、社会生活における不適応感といったものが、身体的機能の劣性、内科的訴えとして置き換えられているのに対し、半健康群のボディ・イメージ得点には、自己の身体についての外観的な面での意識や不満が現れていると考えられた。つまり、臨床群と半健康群では自己のボディ・イメージ評価における着眼点自体が異なっていると考えられ、一概に仮説が棄却されたとは言えない結果であった。

次にロールシャッハ・テストによる身体像境界得点の結果では、身体像境界の性質は健康群が最も強固で、精神病群が最も曖昧であり、その間に半健康群が入ることが明らかになり、身体像境界の脆弱性は臨床群において最も高まっていると考えられた。ただし、Pn (Penetration Score)、Pn%ともに三群の間で有意差はなく、Pn得点という観点のみからは身体像境界の脆弱性が完全に確かめられたとは言えなかった。しかしPn反応の内容分析では、明らかに三群の間に内容的・質的な差が見られた。健康群では単に開かれた口を説明することによってスコアされたPnが多かったのに対し、半健康群、臨床群では身体の損傷や喪失についての反応が増え、さらに臨床群では質的低下や破壊・変形を伴う

反応が多かった。またそれらの反応には、不安、敵意、血液、死の表現など、明らかにマイナスのイメージが伴っていることが多かった。

臨床群の身体像境界を得点という測度で健康群と比較した場合には、身体像境界の脆弱さ（特に透過性）は病的なレベルを脱し、一見回復過程にあると考えられた。しかし、以上のような内容分析により、身体像境界の透過性に関して、やはり質的な差異が潜んでいることが明らかになった。その為、身体像境界の障害の程度を問題とする場合には、その得点によって判断するだけではなく、どのような内容を見てそれがスコアされたのかという観点から、内容分析を行う必要があると考えられる。

以上に述べた観点から、ボディ・イメージと身体像境界の相互の関連について考えると、臨床群では、身体像境界が曖昧になっており、また現実検討能力が脅かされているために、自己の身体に対する意識、つまりボディ・イメージが非常に否定的、もしくは不安定になっていると考えることができる。反対に健康群では、確かな身体像境界の存在が予測され、これと相互に関連しあいながら、現実に即したボディ・イメージが形成されていると考えられる。また身体像境界のあり方を判断する為には、Br (Barrir Score) やBr%が低い、PnやPn%が高いといったことで一面的に観察するのではなく、Br-Pnの値や反応内容の分析を考慮した上で、総合的解釈によって判断を下すべきものであると考えられる。

青年期のアイデンティティ

教育学 中野弘敏

心理学において青年期を考察していくとき、

Eriksonが提唱したアイデンティティという概

念は、今日では欠かすことのできない概念となっている。この概念は心理学にとどまらず、多様な領域にその影響を与えている。だが、それは概念の持つ多義的で曖昧な意味のせいもあり、概念の解釈を拡大・変容させる一因となった。そこで本研究では最初にEriksonの考えに立ち戻り、彼の考えから大きく離れないように留意しながら、アイデンティティの概念が理論構築に耐えうるように定義づけの検討を行なった。そして内的斉一性と連続性を概念の柱として捉える見解を示したLewinの定義、「自分を自分たらしめている自我の性質であり、他者の中で自己が独自の存在であることを認めると同時に、自己の生育史から一貫した自分らしさの感覚を維持できる状態である」を支持した。

次に本研究の方法論について先の定義を踏まえて検討した。従来の研究では、質問紙法とMarciaの考案した半構造化した面接を中心とした面接法が主流であったが、それぞれの短所を補うために、質問紙法と独自の半構造化した面接を組み合わせてアイデンティティの状態を捉えることとした。さらに、アイデンティティを多面的に捉えるために、質問紙と面接によって意識的な一側面にアプローチするだけでなく、一個人の人格に全体的・構造的にアプローチするために、投映法の一つであるロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストとする）を用いた。これまで、アイデンティティ研究にロ・テストを取り入れた研究は少なく、この領域の研究はアイデンティティ研究にとって意義があると判断した。従って本研究ではアイデンティティの確立・拡散によって、ロ・テストにみられる人格像及び指標の特徴を明らかにするとともに、本研究の方法がアイデンティティ研究にとって有意性があるか否かを検討することを目的とした。

本研究はⅡ部構成である。研究Ⅰでは質問紙の検討を行なった。質問紙として用いる

Rasmussenのアイデンティティ尺度（以下EISとする）の日本語版は質問項目数が多く不正確なデータとなりうる可能性があるために、統計的処理により質問項目を削減して、その簡便化されたEISの信頼性を検討することにした。調査は大学生298名（男性119名、女性179名）に対してEISの日本語版（72項目）を実施して質問項目数を相関係数の高いものから48項目を抽出した。一週間後に実施した再テストにも回答のあった247名（男性95名、女性152名）のデータに基づいて相関係数を求めたところ高い値を示し、簡便化したEISの信頼性が高いことがわかった。

研究Ⅱでは、研究Ⅰで簡便化したEISと半構造化された面接及びロ・テストを用いて、本研究の目的を検討した。大学生・大学院生52名（男性19名、女性33名）に対して、個別にロ・テストを実施した後、EISを行った。EIS得点を基に上位群（7名）・下位群（7名）とに分け、ロ・テストのフィードバック時に面接の協力を求めたところ、上位群5名（男性1名、女性4名）、下位群5名（男性1名、女性4名）の計10名の同意を得られた。この10名に対して一対一の半構造化された面接を行ない、評定した結果、上位群は全員、下位群は4名（全て女性）がそれぞれ確立群・拡散群に相当しており、以後確立群・拡散群として取り扱うことにした。その中で、確立・拡散が顕著だと思われるケースを両群から3ケースずつ選出し、ロ・テストとの関連を考察した。

その結果、確立群・拡散群に以下の特徴・違いがみられた。面接内容では、①将来の目標を持っているか、または確信のある職業的な方向性が定まっているか否か、②自分の人生について主体性をもって行動しているか否か、③自己受容が肯定的にできているか否か、の違いがあった。ロ・テストの指標では、確立群には①W:MではWの比率が過度に高い、②体験型は外拡

型が優位、③適量のm反応・FK反応、拡散群には①W:MではMが優位、②体験型は内向型が優位、③m反応・FK反応の欠如、といった特徴がみられた。

ロ・テストにみられた人格像の特徴として、確立群は①要求水準が過度に高い、②体験型は現実の順応性の高さを特徴とした外拡型、③興味・関心の幅が広く活動力がある、拡散群は①不安・抑うつな気分・ストレスの存在、②過度の内的統制・情緒の抑制、③自己洞察の欠如などが上げられた。

これまでの考察より、質問紙と面接において評定したアイデンティティ確立群・拡散群に、ロ・テストで得られた特徴を加えることによって、アイデンティティの確立・拡散の状態をより適切に、幅広く捉えることができることがわかり、本研究の方法論は意義があることが実証された。

今後の課題として、面接の質問内容の再考、性差の検討、各ケースの縦断的研究の必要性、があると考えられた。

T.OgdenのProjective Identificationに関する一考察

教育学 原 渡

精神分析は、S.Freudに始まり数々の理論的分派を果たした。精神分析技法理論は、患者の精神内界の現象と治療者との関係性をどのように捉えるかであるといえよう。しかし、各学派により捉え方・解釈は様々である。

ところが、実際多くの素晴らしい臨床家達のケースに触れるうち、治療場面で起きている治療者－患者関係は、各学派ともに素晴らしい臨床家になればなるほど、その関係性は似通っていることに気付かされる。

アメリカの精神分析家T.H.Ogdenは、各学派による捉え方・解釈が様々である状況を、精神的思考の損害であると考えた。そこで彼は、投影同一視（Projective Identification）という臨床上の現象レベルの概念を三つの段階に分けて提唱することにより、患者－治療者間の現象を記述する様々な概念を記述する既存の投影同一視及び近似概念を統合しようと試みている。

しかし、Ogdenは、これらとの理論的整合性には触れておらず、Ogdenの投影同一視の中に

どの様に位置付けていくかについても述べられていない。

更に、Ogdenは、クライン派および対象関係論に立脚する理論の影響を強く受けており、精神分析において双璧をなすA.Freudをはじめとする自我心理学派に、Ogdenが主張するように適応できるのかという疑問が生じる。

私はこの論文の目的を、Ogdenが投影同一視を統合する際に明確になされていない、既存の投影同一視及び近似概念の位置付けをその理論的整合性の面から再検討し、理論的差異によって曖昧に使用されてきた“攻撃者との同一化”とを統合する為の基礎研究に位置付けたいと考える。

本論文では、Ogden(1982)を中心とし、まずOgdenが提唱する投影同一視の三つの段階（Phase One 投影段階、Phase Two 投影者の圧力を伴う相互作用段階、Phase Three 再内在化過程）に沿って、既存の投影同一視及び近似概念と比較検討を行う。この際、私はOgdenの

投影同一視を上層・境界・下層の三層に分け、既存の投影同一視及び近似概念を位置付けていく。

次いで自我心理学派への応用を念頭に置き、その相違について検討する。これは、従来より論議されてきた投影と投影同一視の区分をどうするか、区分するとすれば、投影同一視を通した投影（Phase One 投影段階）をどう位置付けるのか、また、攻撃者との同一化での投影過程とこれらとの関係はどうなっているのかという点とその主な論点となり、この点を中心に検討していく。

本論文の構成は、まず、用語を整理し、1章でく投影同一視の歴史的展望を、2章では、Kleinの投影同一視と、A.Freudの攻撃者との同一化との比較を中心にく投影同一視と自我心理学的近似概念をく検討し、Ogdenとの比較の土台を築く。

3章では、Ogden (1982) が分類した投影同一視の三つの段階に沿って、三の側面と共に既存の投影同一視及び攻撃者との同一化を比較検討を行う。

そして、4章では補足として、Ogdenのクライン派と自我心理学派の概念の橋渡しの試みを通してく投影同一視の自我心理学への応用をめぐって～治療構造及び転移との比較～を行い、

今後の研究の足掛りとする。

その結果、Phase One：投影段階に於いては、（上層；A.Freud、境界；Kernberg,Adler,Modell、下層；Kleinの概念）、Phase Two：相互作用に於いては、（上層；A.Freud、境界；Kernberg、下層；Kleinの賦活性の示唆だけでは十分ではなく、Ogden特有の概念であり、Spitzの“quasi-telepathicコミュニケーション”及びMahlerの共生幼児精神病のメカニズムと類似の概念）、Phase Three：再内在化は、ほとんどの分析家は想定しておらず、Ogdenは再内在化の過程を含めることにより、投影同一視をワンタムの過程ではなく、繰り返され、横軸だけの過程ではなく、縦軸の変化も加えた可変的な過程として位置付けられることを私は示唆した。

また、自我心理学派への応用をめぐっては、自我心理学派は、最も発達した自我の部分（健康な自我の部分）を重視し、その部分と治療同盟を結ぶことが治療機序であり、Ogdenの投影同一視の様に病理性もつすさまじい影響力を積極的に定義付けるよりは、治療機序を助ける部分への定義付けがなされる概念が有用であり、近似概念としてA.Freudの攻撃者との同一化を内包することは可能であると考えられるが、治療上用いる臨床概念としては、その有用性を発揮することは、難しいと結論付けた。

バウムテストでうろを描く子どもの性格特性

—遊びかたを中心に—

教育学 西川 絹 恵

日常生活と遊びは密接な関係がある。また遊びという活動は子供たちの心身の成長や発達にとっては大きな意義を持ち、役割を果たすことは昔からいわれてきたことである。それでは遊びが子どもの成長発達に対してどのように関わ

り、どういう役割を果たしているのであろうか。深谷和子 (1975) は遊びが子どもの成長発達に対して持っている諸機能は、次の5つに分類されると述べている。

(1)発達と運動技能の獲得

- (2)社会性の発達
- (3)自発性・自主性の獲得
- (4)身体的発達と運動技能の獲得
- (5)知的能力の開発

また、子どもにとって実際に、どのような種類の遊びが必要とされるのか具体的な遊びのカテゴリーというものをあげてみる。

〈遊びの分類〉

- (1)社会性を養うための、集団遊び。複雑なルールや役割分担を伴う遊び。
- (2)他人との共同や競争を適度に含む遊び。
- (3)子供の情緒を安定させるための遊び。
- (4)子どもの集中力や持続をもたらすために、テーマが自由に展開できるような遊び。
- (5)知識を獲得する遊び。

遊びかたはそれぞれの子供によって違い、集団で遊ぶ子どもや個人で遊ぶ子ども、工作が好きな子供、ごっこ遊びが好きな子供、などそれぞれに特徴が伺える。前にも述べたように遊びは日常生活と密接な関係がある。また遊びという活動は子どもたちの心身の成長や発達にとってはおおきな意義を持ち、いろいろな役割を果たす。そこで、バウムテストでの「うろ」の出現は子どもの遊び方とどのような関係があるのであろうか、という事を中心にうろを描く群5人とうろを描かない群5人をランダムに選び、各群の子どもたちの遊び方について参加観察を中心に調査していく。さらに何故そのような差がでるのかということインタビューや観察を通して、検討する。

結果を「うろを描く群」と「うろを描かない群」とで比較すると次のような傾向がみられた。

- (a)参加観察の結果から、「うろを描く」群は「うろを描かない群」に比べて、社会性を養うための集団遊びをあまりしない、集団遊びを好まない傾向がある。また創造的な一人遊びを好む傾向がある。
- (b)「うろを描く群」は「うろを描かない群」に

比べて、社会性を養うための集団遊びにおいて、競争遊びをする傾向が強い。逆に「うろを描かない群」は「うろを描く群」に比べて、社会性を養うための集団遊びにおいて、協同遊びと競争遊びをバランスよく行っているようである。

(c)バウムテストの分析結果とインタビューより、母親と接する時間が「うろを描く群」の方が少ないということからうろを描く群はうろを描かない群に比べて母親に依存しており母親の愛情を欲していると思われる。また、自分の将来に対しての現実性、現実吟味能力は「うろを描く群」の方が、「うろを描かない群」と比べると母親の影響を受けてより高くなっていると思われる。

(d)親子関係尺度による結果より「うろを描く群」は「うろを描かない群」に比べて、自分に対する親の行動に対し情緒的不支持を感じているようである。スターニン得点は「うろを描く群」では拒否型傾向が見られるのに対し、「うろを描かない群」では準平均型の範囲である。「うろを描かない群」は「うろを描く群」に比べて高得点の子どもが多かった。これより「うろを描く群」は母親に対して、拒否的であると感じているようである。

(e)「うろを描く群」の子どもは「うろを描かない群」の子どもに比べると自己中心的に考える事が多く、他人に対する愛他心や自己抑制が低いという狭義の意味での社会性（他者との円滑な対人関係を営む事ができるという対人関係能力）が低いのではないかと推測される。

(f)これらの原因として母親の影響が関係してくるということがいえそうである。AisnworthのStrange Situationによる愛着の性質の測定と3つのタイプのうち、「うろを描く群」はAまたはCタイプである不安定型に、「うろを描かない群」はBタイプである安定型であると予測ができそうである。

このことより「うろを描く群」と「うろを描

かない群」のあそび方の違いは、母親との関係が関連しているといえる。愛着によってもたらされる安心感は母親からの自立と、知的・社会的コンピテンスの発達を保証するように働くと考えられる。それゆえ「うろを描く群」と「うろを描かない群」の遊び方の違いは、母親が愛着の対象として子供の安全基地として十分にその役割を果たしているかどうかという違いにあるのであると思われる。

以上は愛着の立場から見ての考察であるが、現在までに本研究同様、非常に多くの研究が愛着をベースに、あるいはその影響を受けながら行われてきたが、愛着理論に関してはいくつかの問題点も指摘することができる。

しかしこれらはこの理論の限界点を表すものではなく、今後の研究の方向を示すものであろうとも考えられるということをつけ加えておきたい。

改訂版ワードカード分布テストの試行における一考察

教育学 西村 礼子

自分と外界との間に的確な境界線を引くことは現実に適応してゆくうえで重要である。この境界を心理学的に「自我境界 (ego-boundary)」(Federn, 1928) という構成概念で説明することができる。この自我境界に関して、Ishida (1984) はワードカード分布テストという研究を行っている (以下ワ・テスト)。このテストは、被験者に3つの同心円の描かれている紙の上に56あるいは57の単語の書かれたカードを自分にとって重要なものほど中心の円に配置するよう教示し、その結果から自我境界の強弱や病的サインを見いだそうとするものである。中心円に配置するものは自我領域内に存在するもの、一番外側の円に配置するものは外界にあるものとして意味づけ、分裂病者と健常者との比較によって分裂病者の自我と外界との関係を研究している。本研究においては、このワ・テストに改良を加えて使用した。本研究の目的は、第一に改訂版ワ・テストによって自我境界の概念を映し出すことが可能であるか、被験者の自我境界の機能的な特徴を自我領域と非自我領域の内容分析によって見いだすことが可能であるかを検

証することにある。そして第二に、自我境界とロールシャッハテスト (以下ロ・テスト) の身体像境界 (Fisher & Cleveland, 1968) の関係についても考察し、その境界の状態によって領域内外に存在する内容には変化が現れるのかということ健常者 (学生群) と精神障害者 (センター群) を比較することによって明らかにし、その特徴的な傾向を探ることを目的とする。

本研究の方法については、単語カード数を100枚にし、単語の内容も大幅に変更した。実験方法および手続きに関しても検討し、単語カード全部を配置させるのではなく、まず被験者に「自分自身を説明するのに適切であると思われる」50枚の単語カードを選択させ、配置させるという方法に変更した。そして、配置の際の教示方法も「自分の内側にあるものは円の中心に、外側にあるものは円の外側に…」という方法に変更した。さらにテストバッテリーとして、ロ・テストの身体像境界の概念を組み合わせることによって、身体像境界得点を自我境界の表現として捉え、自我境界の機能と性質をより把握及び比較しやすいものとした。詳細は本文の方

法・手続きの欄に記載している。

本研究の結果として、単語選択時における両群の特徴的な傾向は、学生群が選択した単語はより抽象的で想像性に頼るところの大きい単語であり、センター群が選択した単語はより具体的で視覚的及び感覚的にも明確な形を持っているものと思われる。このことからセンター群は学生群と比較して抽象的な概念を把握する自我機能が弱まっていると考えられないだろうか。Federnも、抽象的概念に対する思考能力の喪失は精神病理的諸徴候を構成する主要な原因の一つであると述べている。

また、単語配置時においては、円Aと円Bの配置において学生群が身近な外部環境であると認識しているものをセンター群は自我領域内にあるものとして同一化しており、学生群が自我領域内にあると感じているものについてセンター群は身近ではあるが中心領域を成すものではないと認識している点である。センター群は身近なものの中で自分を独立させることができず、それらと自分とを混同しているように感じられる。また、抽象的な概念を選択しても、それら

を自分の中にあるものとして統合することが困難であるように見受けられる。センター群には自我境界の堅固さが欠如して、自他の区別や同一性が曖昧なものとなっており、「個別化の危機」(木村, 1975)の状態にあるのではないだろうか。

また、ロ・テストの身体像境界における防御的な側面 (Br) に関しても、センター群は学生群と比較して有意に値が低く、改訂版ワ・テストの結果と重ね合わせると、センター群は外的自我境界の防御性が不十分で身近なところからの刺激を防ぎきれず個別化をしていくうえでは不安定な状態であると考えられる。

主要文献

Federn, P. 1953 Ego Psychology and the Psychoses. (Ed. by Weiss, E.) Imago Pub. Co. Ltd, London,
Ishida, H. 1984 Experimental Psychological Studies On Schizophrenia: Word-Card Distribution Test and Some Psychological Consideration. Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica, Vol.38, No.2, 91-110,

コミットメントの構造

教育学 森屋 匡士

心理学においては伝統的に、情動や感情など人間の“情”の部分と、動機や意志、認知・認識など人間の“理”の部分は、各々が独立に研究されてきた。しかし、この人間の情動過程と思考過程を別個に捉えるこの考え方により、情動は、動因や神経中枢の覚醒などの、認識過程、思考過程より下位のものに限定して扱われがちであった。結果として、情動は心理学研究の主要なテーマとして考えられてはこなかったので

ある。

一方、1940年代～1950年代におこったニューロク心理学のムーブメントは、従来の知覚研究を批判し、人間が行なう能動的な認知の働きを強調したものであったが、それは同時に、人間の情動の研究への関心呼び戻した。特に、近年のアメリカ心理学においては、情動現象を論じる際に、情動が生じる際の認知的働きを強調する立場が顕著にみられるようになっている。

中でも、心理社会的ストレスの研究に始まって、人間の情動に研究の幅を広げてきたLazarusの理論においては、情動が生じるためには認知の働きが必要不可欠であるということが一貫して強調されている。Lazarusによれば、人間の情動とは、個人と環境とのトランスアクションな関係の中から生じてくるのであるが、この現象を論じる際に注目されてくるべきなのが、Lazarusのいうコミットメントの概念であろう。コミットメントとは、個人が自分が置かれた環境で出会う出来事や状況において、情動的になるか否かを、そして、情動が生じるとすればその強弱を規定するものである。そして、さらにはその出来事や状況について、害や脅威を感じるのか、あるいは挑戦する努力の対象として捉えるのかを規定する。コミットメントが深いほど、心理的に脅威を感じる潜在性は高まるのであるが、他方、そのコミットメントの深さ、強さが障壁の克服の努力を持続させる方向に向かわせる力ともなる。

このことから、人間の情動、ひいては主観的健康 (well-being) を予測していくうえで、個人がそれぞれにもつコミットメントのパターンを知ることが重要になってくると考えられるのである。

そこで、本研究ではLazarusらの研究を受けて、コミットメントのパターンを探索的に研究することを目的とした。方法は以下のとおりである。40のコミットメント項目のリストを用意し、それについて次のような質問をし、判断を求めた。すなわち、(a)この項目が自分にとってどの程度重要であると考えていますか、(b)この項目について現在どの程度満足していますか、(c)この項目についてこの先自分がどの程度達成することを期待しますか、というものであった。

ここで得られた結果からは、(a)への回答すなわち重要度認識と、(b)への回答すなわち満足度評価が、それぞれに(c)への回答すなわち達成期待に影響を及ぼすことが考えられた。また、満足度評価の高低よりも、重要度認識の高低の方がより直接的に、達成期待に影響していることが示唆された。と同時に重要度認識、満足度評価、達成期待の変数間に因果関係を見出すことは困難であることも確認された。

また、個人、特に本調査の被験者群である大学生は、次の5つの次元にわたってコミットしていることも示唆されていた。すなわちそれは、“安寧”、“個人的・社会的成長”、“親和欲求”、“能動性”、“利他的行為”であった。

教育福祉の構造分析

教育学 木村 榮 作

教育福祉について、従来別々で考えられていた教育と福祉を、“教育－福祉”とつなげ単純な“ワカラナイータスケテホシイ”という命題に簡略化をして、日本を中心にみた人類の歴史の中に対象化をして分析してゆきました。

参考としましては、梅根悟氏と吉田久一氏に

多く学び、両氏の先行研究を、筆者の論点からまとめてみました。

いまなぜ教育福祉が求められるのかを初めに述べ、子どもの生命と権利を守りゆたかにしていくという視野から研究する旨を述べました。

そして村井実氏に学んで、ひとの「善さ」を

志向していく教育福祉論の考究をまとめました。その後は、歴史の流れにそって教育福祉をみていくこととして原始共同体の教育福祉をまずとり上げ、ついで古代国家の教育福祉を考究いたしました。

ついで、封建社会の時代に至るまでの教育福祉についてを考究いたしました。

ここまでの内容は、原始時代において、学問もなかった頃、教育福祉は共同体の営みにうもれていた事、そして階級の成立とともに原始的な共同回復の営みとして、「世界宗教」が起こったこと、その世界宗教は、仏教、キリスト教、儒教をとりあげて考究したことです。

また次の封建社会の教育福祉ではしだいに宗教が力を失い、経済的な作用によって農民の分解が起こり、都市に流入して財産からの自由と人格的自由をもっていったことについて考究しました。

さらに近代市民社会の成立では、「人格責任論」が問題になることや、その社会は資本主義社会であり、労働者と資本家の対立が基軸とな

ることについて考究しました。

この資本主義社会では教育と福祉は分化していったこと、相対的剰余価値の生産に教育があがったことを分析してみました。

そして、哲学の問題を最後に思想分析しました。さきの「人格責任論」批判と関連があります。哲学だけ独立させて考究しましたのは、筆者の哲学の再生に期待をよせるという思い入れからです。

さて本論文の特色ですが、全篇をとおして階級的立場の論及を打ちだしたことでした。けれども単純な人民闘争や社会経済構成体の移行を打ちだすことはしませんでした。あくまで“ワカラナイタスケテホシイ”に応える“教育—福祉”的なものにしました。

やや後半において倫理色が強いと思われるかも知れませんが。前半の実証色に比べればですが。しかし、筆者の姿勢は、“ワカラナイタスケテホシイ”をめぐるひとの「善さ」を志向するものであるからです。

以上が本論文の構成です。

個性化教育の理論と実践

教育学 藤原祥宏

現代社会は科学技術の発達により、情報化、国際化が進み、これからはますます複雑で多様な変化を遂げようとしている。このような時代の中で、また将来の21世紀の時代でたくましく生きぬくことができる子どもを育てるために、現行の学習指導要領は、自ら学ぶ意欲と、そのような時代に対応できる能力の育成をめざし、さらに基礎・基本を習得させ、子どもの個性を生かす教育をしていくことが必要であることを示している。しかし現状の学校教育は調査結果

を見ても、知識量は豊富であるが、思考力、判断力、表現力といった能力が乏しく、学習指導要領の求める教育が十分にできていないといわざるをえない。したがってその「個性を生かす教育」の姿を考えてみる必要がある。

この「個性を生かす教育」は明治時代に知識の注入主義を批判し、児童中心主義を唱えたところから始まる。そして欧米の教育思想の導入と大正デモクラシーの影響により、自由教育が盛んになり、ついには全国の教育論者がその独

自の思想を講演する「八大教育主張大会」までが開かれた。しかし十五年戦争により国家主義教育が強まり、一時は衰退するが、そのような時代を経て児童中心主義、自由主義の教育は、戦後間もない頃には復活をする。ところが昭和30年代には学習指導要領に法的拘束力が与えられ、教育内容に国家統制が加えられ、「個性を生かす教育」は再び廃れてしまっていた。

このような歴史をふまえて「個性を生かす教育」は現代社会に必要とされるようになったのであるが、実際にその教育を行う際に、「個性」をどのようにとらえるのかを考えなければならない。個性はその人の特徴・特性が実体的にとらえられがちであるが、そうではなく公の場においてありのままの姿で何かに向かい、何かを主張し、行動しているところにその人の個性があらわれているというように全体的にとらえられなければならない。また「個性を生かす」には「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの方法論があり、前者は学習の際に個人差が考慮されることを、後者はその個人の得意な方法、好きな内容が学習に反映されることを認めている。

「個性を生かす教育」をめざすための具体的な学習形態を示す、学習プログラムのモデルがある。大きなものは全部で七種類あるが、そのうち「指導の個別化」に対応したものは、一斉指導補足モデル、類型別グループモデル、学習ベースモデル、学習スタイルモデルで、一方の「学習の個性化」には、学習順序選択モデル、

学習課題選択モデル、学習課題設定モデルがある。

この学習プログラムの基本モデルにもとづいて、「個性を生かす教育」を実践している学校の一つに愛知県東浦町立緒川小学校がある。緒川小では学習プログラムを「学習の六態様」という形式で組み、「指導の個別化」には、「はげみ学習」「集団学習」「週間プログラム」が対応し、「学習の個性化」には、「総合的学習」「オープン・タイム」「集団活動」が対応している。

「はげみ学習」は基礎的、技能的な内容を徹底して定着させるための学習態様である。「集団学習」では完全習得を図るための学習や、柔軟な学習集団を編成することも考慮したクラス単位による一斉学習、そして小ゼミナール形式の学習を行なっている。「週間プログラム」は一定の制御のもとに、自学をすすめる複数教科同時進行の単元内自由進度による学習である。

「総合的学習」では子どもたちの興味・関心を優先させ、生活体験に根ざした新たな主題のもとですすめる学習や、いくつかの教科、領域を総合し、年間を通して一貫したテーマを追求する学習が行なわれる。「オープンタイム」は子どもたちが自分の計画に従って学習をすすめる契約学習的なものである。そして最後の「集団活動」では個人レベルでは得られにくいメンタルな側面に対する活動をめざしている。

この論文の最後には緒川小の「学習の六態様」について、堀尾輝久氏の「情報知」と「了解知」の面から少々考察してみる。

『植民地における日本語教科書の一考察』

― 芦田の朝鮮国語読本を中心に ―

教育学 吉川加代子

芦田恵之助と日本語教科書即ち、朝鮮「国語読本」の存在を知ったのは本学入学後である。

国語教育の実践家であり、綴り方教育における「随意選題」の提唱者としては著明な芦田である。そして朝鮮で、日本語教科書を編纂しているにも拘らず日本語教育の分野においては、その名は記されていない。この疑問と、その後芦田の日本語教科書が、アメリカで日本語教育にとりいれられたという事実の二つが本論文で芦田を取りあげた基底にある。

芦田の日本語教科書はアメリカでハーヴァード大学の学生たちを教えるための『大学生のための初等日本語』(Serge Elisseff and Edwin O. Reischauer, *Elementary Japanese for University Student's*.1941)として1941年に出版された入門書にとりいれられた。またこの入門書は、後に太平洋戦争が起こってからは、アメリカ海軍に、この本を台本に使った日本語の速成コースが設けられ、熱心に学習すれば1カ月間で、ひらがなから「候文」の読み書きができるようになったといわれている。アメリカの日本研究者として知られているドナルド・L・キーン氏もその日本語学校で学んだ一人だったのである。

このような歴史をたどった芦田の日本語教科

書を、本論で取りあげ、その教科書の背景、ならびに内容の実証的考察を試みるものである。第一章では朝鮮「国語読本」の背景として、芦田の教育思想との関わりと読本編纂に至る経緯を、第二章として日本の植民地言語政策を朝鮮総督府の国語（日本語）普及策として、その政策を進めた総督府の学務官僚を中心に、その統治政策に理論を与えた国語学者・保科孝一にもふれ、また総督府の読本編纂の歴史的経緯にも言及する。第三章として朝鮮『国語読本』の検証を音調論、語・句の表現、挿画の三つの観点から実証的に考察していく。

以上の考察から、特に芦田の日本語教科書の検証をみると、この日本語教科書が芦田の思想（児童観）とも密接にかかわり、その児童観が教科書に持ちこまれたことが認識できる。また保科と芦田の關係に言及するなら、保科の言語理論が芦田の教科書によって実践された形になり、つまり日本の植民地言語政策はこの両者によって有効に作用した側面がみられるということである。